SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

スガラムルディの魔女（1608－1610年）：史実とアレックス・デ・ラ・イグレシアのアダプテーション

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大原, 志麻 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027396

スガラムルディの魔女（1608－1610年）
―史実とアレックス・デ・ラ・イグレシアのアダプテーション―

大　原　志　麻

１．はじめに

魔女はローマ時代から中世を通じて存在し、そのステレオタイプが繰り返し構築され続けてきた。女が精神的、道徳的に不安定で、飽くことをしらない情欲を持ち、恨みを買う雄弁さを弄する「弱き器」という定型が、ヨーロッパ文化のほぼすべての側面に埋め込まれ、また男性よりも魔術と関連付けられてきた。魔女の集会での淫らな乱痴気騒ぎも、男よりも女の方が好むと信じられていた[1]。

ヨーロッパではおよそ1450年から1700年の間に魔女迫害が盛行を極め、約５万人が火刑に処された[2]。記録の示すところによれば魔女裁判の被告のおよそ80％が女性であり[3]、そのため魔女は女性であるとされた。そして都市民は少なく、大半が農村の高齢の貧しい独身の未亡人[4]といった、社会的に貧窮したアウトサイダーが大部分であった[5]。そのため魔女狩りはジェンダーに基づく迫害という視点からの研究が顕著である。

魔女狩りについては、ドイツ、フランス、イギリスの事例に関しては膨大な先行研究が存在するが、異端審問の中心地域であるスペインでは驚くほどわず

---

1 Pérez, J., *Historia de la brujería en España*, Espasa, Madrid, 2010, p. 150.

2 Hennigsen, G., “The child witch syndrome. Satanic child abuse of today and child witch-trials of yesterday”, *The Journal of Forensic Psychiatry*, 7, pp. 581-593, p. 584.

3 Scarre, G., *Witchcraft and magic in sixteenth and seventeenth century Europe*, Macmillan Education, London, 1987, p.25. エセックスでは92％、バーゼルでは95％が女性であった。

4 Scarre, G., *op.cit.*, p. 26. 近世ヨーロッパでは一生結婚しない女性が15％にのぼり、たいていの共同体に沢山の独身の女性がいたことになり、また妊娠という危険を避けられたため結婚した女性よりも高齢に達する可能性が高く、魔女として告発される危険が大きくなった。

5 Pérez, J., *op.cit.*, p. 117. アン・ルーエリン・バーストウ（黒川正剛訳）『魔女狩りという狂気』創元社、2001年、11頁。夫・兄・息子がいない女性が経済的緊張にさらされ、未亡人が死亡すれば土地は男性親族に譲渡されるため、直ちに土地を相続したい男性の標的となることから、経済的な要因についての研究もある。

かな魔女裁判しかなく、告発の最高潮も1550年には終わっていたため、その実態はあまり知られていない。イタリアと同様スペインも魔女裁判は、魔女狩りの激しい地域と国境を接する北部で行われる傾向が強かったが、本稿では、スペイン北部のバスク地方で起きたスガラムルディの魔女についてその特徴をみていく。スガラムルディの魔女が裁かれた1610年のログローニョのアウト・デ・フェの事前報告書は、スペインの文学文化に大きな影響を与え、近年でも2013年に公開された映画『スガラムルディの魔女』が大成功を収めている。ここでは、スガラムルディの魔女迫害の全容を提示し、それが映画『スガラムルディの魔女』にどのようにアダプテーションされ、またそこにはどのようなジェンダー観の変遷が見られるのかについて論じていく。

２．バスク地方の魔女狩り

中世においてテンプル騎士団、カタリ派、バルド派、フラティチェリ、フランチェスコ厳格派が異端として告発されるなかで、「空を飛ぶ魔女」「魔女の集会」「悪魔との性交」「幼児の人肉食」といった近世の魔女狩りに繋がる観念が次第に形成されていった[6]。それまでは曖昧な概念だった「魔女」の定義が厳密化された大きなステップの一つは、14世紀に魔女がキリスト教会から異端の烙印を押されたことである。それまでの孤立した魔女イメージに代わって、悪魔を中心にした集会に多数の魔女が集まるというように、指導者を戴き、誤った教義や儀式、ヒエラルキーを持つセクトであるとされた段階である[7]。「悪魔との契約」「悪魔との性的結合」、他者に損害を与える「害悪魔術」そして「サバトへの参加」という四つの柱で定義される魔女観念の基本形は15世紀に完成した[8]。

そして決定的となったのが、1484年12月９日に刊行されたドミニコ会士の異端審問官ヤーコプ・シュプレンガーが記した『魔女の槌』である。この本は魔女が悪魔の力を借りて行う高度な魔術（high magic）が存在するとし[9]、教皇インノケンティウス８世の回勅「限りなき願いをもって」（*Summis desiderantes affectibus*）のお墨付きを得て大ベストセラーとなり、17世紀に至るまで魔女狩りのマニュアルとして繰り返し用いられた。中世における異端の告発は男女を

---

6 スカール、ジョン・カロウ（小泉徹訳）『魔女狩り』岩波書店、121頁。
7 池上俊一『魔女と聖女』講談社現代新書、1992年、15頁。
8 Kraemer, J., Sprenger, H., *El Martillo de las Brujas para golpear a las brujas y sus herejias con poderosa masa*, Estrasburgo, 1486. 小林繁子『近世ドイツの魔女裁判―民衆世界と支配権力』ミネルヴァ書房、2015年、p. i.
9 Scarre, G., *op.cit.*, 1987, pp. 6-8.

問わず、年齢も様々であったが、『魔女の槌』が定型化した魔女像には新機軸が一つあった。それは魔術を使うのは通常女性であるとすることである。またこれ以降サバトへの参加の有無が魔女の審問の最重要要件とされるようになり[10]、近世的な魔女狩りが始まる。

バスク地方はフランスと隣接しており、フランスの魔女狩りの影響を受け、魔女に対する意識がスペインの他の地域よりも高まっていたと考えられる。バスクではいち早く魔女騒動が起き、既に1466年カスティーリャ王エンリケ４世に対しギプスコアから魔女狩りの権限を判事に与えるよう願い出ている。これに対してエンリケ４世は同年８月15日にバジャドリッドからの国王文書により対応をしている[11]。その後1507年、1517年、1520年代に魔女狩りが起き、そしてフランス側のピレネー山脈での魔女迫害が国境を越えるかたちで、スガラムルディで激しい魔女迫害が始まった。

『魔女の鉄槌』のサバトの定義は、フランシスコ会士マルティン・デ・カスタニェガがログローニョで1529年に刊行した『よく根付き確立した迷信と呪術と空虚な呪文と迷信とそれについての対処可能な解決法についての論考』で紹介されたことによりバスク地方で広く知られることとなる。特に『論考』の第三章では、カトリック教会での秘跡と悪魔の教会での呪詛が対比され、ミサのパロディもしくは黒ミサがどのように魔女に実践されているかについて詳述されている[12]。「カトリック教会における身振りについて、臣下は教会と世俗のより身分の高いものの手に、教皇に対しては足に絶対的な信仰と忠節の証としてキスをする。（中略）暴君であり、愚弄や嘲笑をする者たちの主人である悪魔に対しては、身体でもっとも恥ずべき場所にキスをするのだ。」[13]。また第五章では、「なぜ悪魔の僕は男性よりも女性が多いのか」について述べ、「女性は全ての悪徳の塊で、それが老いていて貧しければなおさらのことだが、若い女性もこれに当たる」[14]として、後に詳しく述べるアケラーレ（スペインにおけるサバトに類似する集会）の様子や老いた貧しい女性という魔女の基本形が示されている。

既にこのようなサバトの様子は、スガラムルディの魔女事件の少し前の1595

---

[10] 池上俊一『魔女と聖女』講談社現代新書、1992年、27頁。

[11] Caro Baroja, J., *Las brujas y su mundo,* Alianza Editorial, Madrid, 2010（初版は1966年）, pp. 193-194.

[12] Caro Baroja, J., *Las brujas y su mundo,* p. 200.

[13] Castañega, M. de, *Tratado muy sotil y bien fundado de las supersticiones y hechicerías, y vanos conjuros y sbusiones, y otras cosas al caso tocantes, y de la possibilidad y remedio dellas*, Logroño, 1529, en Madrid, Sociedad de bibliófilos españoles, 1946, p. 51.

[14] Caro Baroja, J., *Las brujas y su mundo,* p. 201.

年にスガラムルディに程近いナバラのインサの住人のマリア・エルナンドによる王国裁判所での供述によく表れている。

「ホアン・マルティネス・デ・ペルゴリは、姪のマリ・エルナンデス・デ・オイス・デ・ペルゴリに「とある場所」まで行くよう説得した。「なぜならそこで多くの人が踊っているから」である。彼女は当時７か８歳で、説得されるがまま裸になり、そしてシャツを着て、片隅にある鍋から取った軟膏を頭に塗られた。「そして窓から空中へ連れ出し」多くの人がレベックや吟遊詩人の歌や他の音に合わせて踊っている野原へ連れて行った。そこでは皆シャツか他の白いものを身に纏っていた。叔父は彼女が全てを見ることができるよう距離を置き、そして家まで空を飛んで肩に乗せて戻った。二か月後、再び彼女を説得し、彼女は同様に応じた。

野原に着くとすぐに叔父はマリ・エルナンデスを、二つの人形が座っている金の椅子の前に据えた。一つは黒い男で帽子をかかげ頭に二本の角が生え、肩までの黒く長い髪と黒い髭で黒い布を身に纏っており、顔も手足も黒いが人間のようであった。もう一つは前述の椅子に座った美しく白い顔も手足も女性のもので緑の服を纏っていた。ホアンは「あれらの二つの像はベルゼブブとその妻で、全ての被造物の真の神であり救世主であり崇拝し敬わなければならず、マリ・エルナンデスは、彼らに従うため我らが主とカトリック信仰を否定しなければならない」と言った。マリはそれを望まず、その時は、叔父は彼女を背中にのせ空中から家に連れて帰った。その時も人々は踊っていた。

７年後、彼女が14歳の時、叔父はマリを野原に戻りベルゼブブを崇拝し神を否定すれば金持ちになれると説得した。いつものように彼女を裸にし、シャツを着せ軟膏を頭に塗り、野原まで空から連れて行った。そして彼は彼女に「この野原はアケラレアというのだ」と言った。叔父は悪魔に「ベルゼブブを崇拝し神を否定する」といった。すると前述の塊は椅子から立ち上がり、何も言わず彼のところに来て、多くの女性たちが前述の塊であるベルゼブブを呼び、自分の手でスカートをたくし上げ、順番に尻にキスをし、マリ・エルナンデスもホアン・マルティネスが言った富への期待とともに同じことをした。その時ベルゼブブは女性たちと公に関係を持ち、彼女たちの中にいたマリ・エルナンデスに４分の１レアルの大きさの金にみえるようなものを与えた。ベルゼブブは彼女の処女を奪い、家に戻った時シャツが血まみれだった。男たちは女性の像と踊り、顔にキスをし、性的関係を持った。その時からマリ・エルナンデスは毎年「アケラレアの前述の野原」に赴いた。ベルゼブブは頭に二本の角が生え

ていた。最も集会が催されたのは金曜日だった[15]。彼女はベルゼブブと何回か野原もしくは洞窟で性的関係を持った[16]。」

まだアケラーレという言葉は確立しておらず集会（junta）となっているが、「ベルゼブブは彼女の処女を奪い、家に戻った時シャツが血まみれだった」という表現はスガラムルディにおけるマリア・デ・イリアルテの供述と類似している[17]など、マルティン・デ・カスタニェガに紹介されたサバト（アケラーレ）がナバラとバスクにおいて既に浸透していたことが窺い知れる。

3．スガラムルディの魔女

現代のスガラムルディの魔女迫害研究は、1933年のカロ・バロッハ『魔女とその世界』が皮切りとなったが、原史料に基づく本格的な研究は、デンマーク人の文献学者ヘニングセンによって始められた。ヘニングセンが既に集めていた多くの史料に加えて、1967年に、2000人の魔女を尋問した異端審問官サラサールが作成した6200葉の史料を発見し紹介したことは特筆すべき業績である[18]。これを画期として、サラサールの史料を基にした研究が多数発表されるようになる。1968年にはカロ・バロッハが「1609－1619年の魔女術についての再検討」[19]を発表し、ヘニングセンの集めた史料や論考を参照し、バスクとナバラの魔女についての再分析を行っている。その後1972年にイドアテが刊行した『ナバラにおける魔女術についての異端審問史料』[20]もまた、バスク・ナバラの魔女研究のもう一つの重要な史料集となっている。1980年にヘニングセンは『魔女の弁護人』を出版したが、この研究によってそれまでは無名だった異端審問官サラサールの、バスク地方の魔女狩りにおける革命的な役割についての詳細がわかるようになった。加えてヘニングセンは2004年に、『サラサール文書集』をオランダとアメリカで刊行した。また今年では、2013年にミケル・アスルメンディ

---

[15] Henningsen, G., Henningsen, G., *El abogado de las brujas, Brujería vasca e Inquisición española*, Madrid, Alianza Editorial, 2000, p. 116. アケラーレは月曜日と水曜日そして祝日聖の前夜（ヨハネの前夜祭）に催されることもあった。

[16] Usunáriz Garayoa, Jesús Mª, La caza de brujas en la Navarra moderna (siglos XVI-XVII), *Revista Internacional de los Estudios Vascos* (2021), pp. 307-350, pp. 323-325. Henningsen, G., *El abogado de las brujas*, pp. 115-116.

[17] Henningsen, G., *El abogado de las brujas*, p. 121, pp. 127-128.

[18] Henningsen, G., “The Papers of Alonso de Salazar Frías. A Spanish Witchcraft Polemic 1610-14”, *Temenos*, 5, 1969, pp. 85-106.

[19] Caro Baroja, J., “De nuevo sobre la historia de la brujería (1609-1619)”, *Príncipe de Viana*, nº 30, Nº 116-117, 1969, pp. 265-328.

[20] Idoate, F., *Un documento de la Inquisición sobre brujería en Navarra*, Aranzadi, Pamplona, 1972.

がヘニングセンの史料にバスク語の言語学的な知識からアプローチした『スガラムルディの魔女』[21]を刊行し、版を重ねている。本節ではスガラムルディの魔女事件について、ヘニングセンがまとめた1610年11月７日のアウト・デ・フェに向けての異端審問所への報告書を用いて、論点と特徴について明らかにしていきたい。

図１　カロ・バロッハ家のベラ・デ・ビダソアの邸宅（2019年８月筆者撮影）
図２　スガラムルディのアケラーレが催された洞窟への道案内（2019年８月筆者撮影）

魔女狩りで悪名が高かったのは、古い異教的な伝統の残る山岳地帯であったり、いくつかの文化が合流する辺境であったりしたが[22]、スガラムルディとウルダックスという二つのピレネー山岳地帯にある小さな村はラブール地方と国境を挟んで接していた。スガラムルディ教区はウルダックスの教会に属しており、プレモントレ会の修道士によって管理されていた。この二つの村の人口は約600人で、スガラムルディの住人は主に自営農と羊飼い、ウルダックスの住人はウルダックス修道院の土地を耕す農奴であった。ランクルは1613年の著書『堕天使と悪魔の無節操一覧』においてスガラムルディの魔女の裁判である1610年のログローニョのアウト・デ・フェに触れているが、ここに告発された31名の魔女のうち、25人がスガラムルディとウルダックスからの人で、これらの男女は20歳から80歳の成人人口の５分の１にあたる人たちであった[23]としている。

スガラムルディでは既に異端審問官による新たな迫害の準備は整っていたが[24]、

[21] Azurmendi Inchausti, M., *Las brujas de Zugaramurdi. A historia del aquelarre y la inquisición,* Almuzara, Córdoba, 2013.
[22] 池上俊一『魔女と聖女』講談社現代新書、1992年、22頁。
[23] Henningsen, G., *El abogado de las brujas,* p. 46.
[24] Henningsen, G., *El abogado de las brujas,* p. 53.

告発の発端となったのは、1608年12月初頭のマリア・デ・シミルテギという20歳の若い女の帰郷である。以下サラサールの調書に基づいて事件を辿っていく。シミルテギは、ランクルによる魔女狩りが席捲した時期のラブール地方のシブール、特に被害の大きかったサン・ジャン・ド・リュズで暮らしていた。彼女の両親はフランス人であったが、シミルテギが16歳になるまでスガラムルディに住んでおり、その後、フランスのシブールへと移り住んだ。父親はアダム・デ・シミルテギで母親の名前はわかっていない。フランスに３，４年住んだ後、親はフランスに残ったが、マリア・デ・シミルテギは一人で働きに戻った[25]。

マリア・デ・シミルテギは久しぶりに会った友人や親戚にフランスであったことを話した。シブールには同い年の友達がおり、時々彼女の家に泊まった[26]。彼女は海辺での悪魔の集会に連れて行ってくれ、そこで大いに踊り楽しんだ。シミルテギは当初それがアケラーレだとは知らなかったが、気づいた時には彼女の友人や他の女たちが彼女を強制的に魔女にしようとし、キリスト教の信仰を放棄しなければならなくなった。決して聖母を否定するには至らなかったものの、１年半の間悪魔の集会の熱心な一員であった[27]。1608年の四旬節にキリスト教徒に戻ったが、魔女の報復への恐れから７週間病気となった。そこにエンダーヤの聖職者が来て、告解をし、悪魔と戦うための「大いなる精神的な治療」を授けた。聖職者は７月の終わりにバジョーナ司教に赦免の許可を得て聖体拝領を与え、最終的に病は全快した[28]。

シミルテギはスガラムルディでアケラーレに二度参加し、そこに誰が出席していたかを熟知しており、躊躇なく魔女の名前を挙げていった。第一に挙がったのは農民のエステベ・デ・ナバルコレナの妻で22歳のマリア・デ・フレテギアの名前である。これは夫とその親族集団がマリア・デ・シミルテギに告発を頼んだことによる[29]。

シミルテギは、もし彼女と話すことができれば、全てを告白させると答えた。エステベと親族はナバルコレナ家までシミルテギを連れて行き、二人の女性は対面し、長い間話し合った。シミルテギはスガラムルディのアケラーレで見た全てを語るといい、マリア・デ・フレテギアは、全てが偽りであると言い放っ

---

[25] *The Salazar Documents* (ed. Henningsen, G.), Brill, Boston, 2004, p. 107. 1610年11月７日の報告書。
[26] Henningsen, G., *El abogado de las brujas,* p. 52.
[27] *The Salazar Documents,* p. 107.
[28] *The Salazar Documents,* p. 107.
[29] *The Salazar Documents,* p. 107.

た。しかしシミルテギにより説得され始めた家族はフレテギアに全てを告白するよう圧力をかけ始めた。フレテギアは何かにより喉を圧迫され、喋られないようにされているかに見えた。その後すぐにシミルテギの言ったことはすべて真実で、「12歳の時にキリスト教の教えを否定し、魔女のセクトの一員として受け入れられた子供のころからアケラーレのヒキガエルの番をした。大工サバトの妻である叔母のマリア・チピア・デ・バレネチェアが悪行の師であり導き手で、彼女が魔女の役目を果たすために訓練し、アケラーレに行く時間になると空を飛ぶための軟膏を彼女に塗った」と告白した[30]。シミルテギは勝利し、スガラムルディの世論は彼女の証明を受け入れ始めた[31]。

マリア・デ・フレテギアはウルダックスの修道院の修道士であるフェリペ・デ・サバレタに、自分が魔女であることを秘密裡に認めた。デ・サバレタは、彼女にスガラムルディの教会において、公に告白を繰り返す贖罪を課した。全ての教区民を前にフレテギアは、自分が悪魔のセクトの一員だった時に彼らに与えた損害について詫びなければならなくなった[32]。

マリア・デ・フレテギアはエステベの父ペトリ・デ・ナバルコレナの農家に住んでいたが、クリスマスに近いある夜に家の外で誰かがうろつく音を聞いた。そして次の日の夜魔女による報復の恐怖にかられた多くの住民が集まってきた。そして悪魔と魔女がフレテギアを一緒に連れていくために姿を現した。人々は犬や猫、豚の姿を見たが、それは舅が夜半に家に入るために庭を横切った際に慌てて豚の群れを誤って放ってしまったからである。何人かの年嵩の魔女は、フレテギアを見ようと椅子の上に上った。フレテギアの母方の叔母でもう一人の師であるマリア・チピアが暖炉を覗いていたが、ここからマリア・デ・フレテギアの父方と母方の二人の叔母が魔女だったことがわかる。そしてフレテギアはロサリオの十字架をつかみ、暖炉に対して悪魔への奉仕を永遠にやめると叫んだ[33]。

---

[30] *The Salazar Documents*, p. 109.
[31] Henningsen, G., El abogado de las brujas, p. 54.
[32] *The Salazar Documents*, p. 111.
[33] Henningsen, G., *El abogado de las brujas*, p. 55.

図３　スガラムルディの遠景（2019年８月筆者撮影）
図４　紋章のついたスガラムルディの古い家々（2019年８月筆者撮影）

それを聞くと魔女たちは姿を消したが、翌朝サタンの部下によるフレテギアの舅に対する復讐が明るみとなった。ペトリ・デ・ナバルコレナの農園の野菜や果樹の根が抜かれており、水車の輪が破壊され、碾臼は屋根の上にあった。ただこのナバルコレナ家の所有物への破壊については多くの目撃者がいるはずであったにもかかわらず訴えがなかったことから、フィクションであったと考えられる[34]。

状況は緊迫し、年末にはおよそ10人の村人が、ミゲル・デ・ゴイブル、エステバニア・デ・イリアルテ、グラシアナ・デ・バレネチェアといった魔女の疑いがある者の家に入り、ヒキガエルを探し始めた。エステバニアの夫である羊飼いのフアネス・デ・ゴイブルは、ウルダックスの修道院に翌日赴き、このような調査への不満を述べた。修道士フェリペは、フアネスに妻を探すよう命じ、フアネスが妻と一緒に戻ってくると、彼女が魔女であることが既にわかっているとして質疑したが、エステバニアは否認した。修道士は他の人々と共に脅しをかけ、魔女であったと告白させた。その時から他の疑わしい人物は暴力により密告を強要され、自白しなければ拷問にかけると脅された[35]。

1609年２月13日の最初の書簡に記されている最初に投獄された４名は大工の未亡人エステバニア・デ・ナバルコレナ、大工の妻マリア・ペレス・デ・バレネチェア、粉ひき小屋の番人と結婚していたフアナ・デ・テレチェアとマリア・デ・フレテギアで[36]、これら４名の女性は新年に教区民の前で罪を告白し住民

[34] Henningsen, G., *El abogado de las brujas*, p. 56.
[35] Henningsen, G., *El abogado de las brujas*, p. 57.
[36] Henningsen, G., *El abogado de las brujas*, p. 89.

と和解をした[37]。

新年が明けての数日で、50名以上がスガラムルディの教会に公開での魔女の告白を聞くために集まった。主犯格であるグラシアナ・デ・バレネチェアとその二人の娘マリア・デ・イリアルテとエステバニア・デ・イリアルテ、加えて羊飼いのミゲル・デ・ゴイブルとその息子フアネス・デ・ゴイブル、ミゲル・デ・ゴイブルの甥で使用人の20歳のフアネス・デ・サンシン、80歳で農民の未亡人のエステバニア・デ・ナバルコレナとその娘で33歳の粉ひき小屋の番人の妻マリア・デ・テチェレアと、大工の妻で46歳のマリア・ペレス・デ・バレネチェアの９名が公開で魔女であると告白した[38]。

36歳のフアナ・デ・テレチェアは18年間魔女をし、子どものうち４人を悪魔に捧げたと述べた。彼女は前年のサン・フアンの夜のアケラーレに参加しなかったとして魔女たちに酷く罰せられた。46歳のマリア・ペレス・デ・バレネチェアはスガラムルディの第三番目の身分の魔女で３人の子どもに魔女術を伝え、何人か殺害したとしている[39]。

80歳のエステバニア・デ・ナバルコレナは子供のころからの魔女で、幾つもの殺人と復讐行為をしてきた。スガラムルディの集会において第二身分の魔女であり、膝に座らせた際に新品の前掛けを濡らした自分の孫娘の食事に毒の粉薬を混ぜて殺害したと告白した。また彼女が振り返って見た若者が「性悪の老女、首根っこがひん曲がってしまえ」と叫んだので殺した[40]。

1609年２月13日の書簡において投獄された二番目のグループは６名で全員が羊飼いのギルドに属していた。グラシアナ・デ・バレネチェアと二人の娘マリア・デ・イリアルテとエステバニア・デ・イリアルテ、その夫フアネス・デ・ゴイブルとミゲル・デ・ゴイブルとフアネス・デ・サンシンは、カトリックの信仰を捨て、グラシアナ・デ・バレネチェアとミゲル・デ・ゴイブルが首領格であることが確認された[41]。

これらの魔女への尋問にあたって1609年５月11日にマドリッドの異端審問議会から、容疑者に対する14項目の質問表が送られてきた。

１．正確に何日に集会があり、どのくらいの時間その場にいたのか、何時に行って帰ってきたのか、集会に行き来しながら通り道に近い場所で時計、

---

[37] Henningsen, G., *El abogado de las brujas,* p. 92.
[38] Henningsen, G., *El abogado de las brujas,* p. 59.
[39] Henningsen, G., *El abogado de las brujas,* p. 92.
[40] Henningsen, G., *El abogado de las brujas,* p. 94.
[41] Henningsen, G., *El abogado de las brujas,* p. 95.

鐘もしくは鳥や犬の鳴き声を聞いたのか。集まった場所からどれくらい近かったのか。

2．集まった日時を予め知っていた場合、誰がそれを彼女に知らせて呼んだのか。

3．夫や妻、父や母や親族や使用人がいて、同じ家で寝ている場合、何度か彼女たちが不在であったならなぜ不在だったのか。これまでの供述と矛盾点があればその理由。

4．乳牛を育て、それを一緒に連れて行ったのであれば、誰にさせられていたのか、彼女たちが行っていたことは何か。

5．着衣もしくは裸で行ったとして服は同じ場所で見つかったのか、他の場所で見つかったのか。

6．家から集会まで行くのにどのくらい時間がかかったのか、距離はどれくらいか、往復の間に誰かに偶然出会った場合、徒歩もしくは足を使わずに急いでいたのかゆっくり行ったのか、それぞれ往復に誰かと連れ立っていたのか、もし集団でいたのなら、羊飼いや他の人が歩くところを通って行くのを見たかどうか。

7．集会への行き来もしくは集会において、イエスの名もしくは他の言葉を口にして集会を台無しにしたか。もしくは悪魔がさらなる助けを与えることなしに道に留まったか。

8．集会に軟膏を塗っていったとしたら、どの部分に塗ったのか、軟膏を塗りながら何を言い、何を行っていたのか、もし軟膏を持っているなら医者か薬剤師に確認し調合と効果について確認すること。

9．集会に赴くのに軟膏は必要なのか。もしくは軟膏なしに何度か集会に行ったことはあるのか。

10. 集会と集会の間に他の者たちと何があったかについて連絡をしたか。別の集会がいつあったか、そのことに触れたか。

11. 聴罪司祭にこれらのことを告白したのであれば何回告白したのか、聖体拝領を受けキリストの祈りを言ったのは何回か。

12. 確かに肉体も集会にいったのか、軟膏で眠されるか想像か幻想に刻み付けられたのか。

13. 子供や他の人物が死んでしまった場合、子供の心臓を引き出したのか、これらの罪や行動を証拠とともに立証するよう努めること。

14. 証人と容疑者が調査の際に共謀した際、調査し真実を明らかにするため、

行動と犯罪をどのように回答するかをみるために、共謀者の一人に同じ質問を行うこと[42]。

この質問表は主にアケラーレについてのものである。アケラーレ（aquelarre/akelarre）はサバトと似たような意味を持ち、akerrが雄山羊、larreが牧草地を表している。このバスク語の単語はそれまで存在しなかった、エリートによる造語で[43]、1609年５月22日にマドリッドに「魔女の首領格については十分に立証済みである」[44]と返答した異端審問官フアン・デル・バジェ・アルバラードによる記述が初出である[45]。すでにアケラレアなど類似の言葉は前述のインサでの証言にも登場していたため、バジェの発明でもなければ偶然のことではないにせよ[46]、スガラムルディでアケラーレという言葉でサバトの概念が確立し、魔女たちの罪状を宣告するために使用される言葉となる。

この質問表は、妖術もしくは魔女術であるとされている行いが実際あったかどうかについてかなり懐疑的で、想像か幻想であるとみなしたり、ハーブなどで混乱していたのではないかと考えるスペインの異端審問官の多数派の意見が反映されている[47]。

スガラムルディの魔女事件は、フランスの魔女狩りとも連動している。ジャン・デスペニェを長とするボルドー地方の高等法院で判事を務めたピエール・ド・ランクルは、1577年だけで400人の魔女の処刑を命じた。1608年にフランス王アンリ４世に「この４年間」で魔女の数が激増したと伝えられると、ランクルは1609年７月１日にデスペニェと共に監察官としてラブール地方で尋問と判決にあたった。そして11月１日の任期終了までに80人の魔女を火刑にし、500人を年少のため赦免した[48]。

1609年８月、異端審問官バジェがウルダックスへ直接赴き、修道院に約一か月滞在した。そこで教会による住民の和解の儀式に出席したスガラムルディの住人８，９名と謁見した。そしてこの機会を利用して、ランクルの代理人とフランス側の渓谷で会うこととした[49]。ランクルは異端審問所の管轄下にある領域

---

[42] Caro Baroja, J., “De nuevo sobre la historia de la brujería (1609-1619)”, pp. 746-747.
[43] Usunáriz Garayoa, J.M., “Un aniversario y un homenaje”, *Revista Internacional de los Estudios Vascos*, 2012, pp. 25-21, p. 19.
[44] Caro Baroja, J., “De nuevo sobre la historia de la brujería (1609-1619)”, p. 748.
[45] Henningsen, G., “El invento de la palabra aquelarre”, pp. 55-65.
[46] Henningsen, G., “El invento de la palabra aquelarre”, pp. 351-359.
[47] Caro Baroja, J., “De nuevo sobre la historia de la brujería (1609-1619)”, p. 747.
[48] Henningsen,G., *El abogado de las brujas*, p. 42.
[49] Azurmendi Inchausti, M., *Las brujas de Zugaramurdi*, p. 70-71.

に居住するすべてのフランス人を追放するためにスペインの異端審問官が申し出た支援を拒絶し、フランスの世俗の司法がスペインの教権による司法よりもより優れていることを異端審問官に示すために、魔女として告発された７件の事件を送検し、子供の告発によるものを含む３件を火刑に処す前に速やかに絞首刑にした[50]。

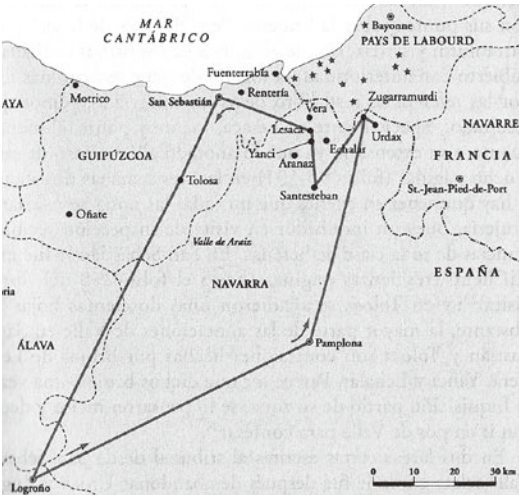


図５ 1609年バジェの移動[51]

この会見の後、魔女告発の根拠が変化し、子供、少年少女が大人たちを告発するようになった。それはラブール地方の方法の模倣でありランクルの影響がみられる[52]。バジェは、まず異端審問官の望む供述を自発的にさせるためにスガラムルディの５人の少女を出頭させた。彼女たちの年齢は12歳から20歳までで、二人はアゴテ[53]である大工のレクンベリの娘で、もう二人はアゴテの風車小屋の番人ブルガとテジェチェア家出身の母親の娘であった。彼女たちからは、恐らく個人もしくは親族全体の利益になるような条件を提示し、説得または脅迫により都合のよい供述を引きだしたと考えられる。これらの少女たちは６年後に瀕死の修道院長に対して、事件の真実を再審議し、告発された者たちが魔

[50] Azurmendi Inchausti, M., *Las brujas de Zugaramurdi*, p. 71.
[51] Henningsen, G., *El abogado de las brujas*, p. 171.
[52] Azurmendi Inchausti, M., *Las brujas de Zugaramurdi*, p. 73.
[53] 職業によって差別された下層民。

女ではなく、告発は暴力と脅迫によって引き出されたことを書面に記すよう要求している[54]。これら５人の少女たちが、逮捕されてログローニョに連れていかれることはなかったが、数キロ離れたランクルの管轄地区であったなら絞首台に連れて行かれたことだろう。

バジェは８月に、子供たちの告発により６名をログローニョに送検したが、そのうちの２人がスガラムルディ出身で、２レアルを納税するのみの貧しいアゴテの炭焼きのエチャベエラ・オディア家の男性と、ベラ・デ・ビダソアで日雇い労働者のサパギンデギと結婚していたイパラギレ家の姉妹であった。バジェの滞在は終わったが、1609年９月26日のログローニョから最高異端審問所に宛てた書簡では、ベセラとサラサールの２人の異端審問官がすでに地下牢に15名を投獄したと報告されている[55]。短期間に子供の告発によりさらにスガラムルディの12名とウルダックスの３名の計17名の逮捕者がログローニョの地下牢に送られた。

また同月ウルダックスの修道院長レオン・デ・アラニバルはサン・ジャン・デュ・リュズからのごろつきの集団を調査するために異端審問所から１人派遣するよう依頼をしている。ウルダックスの修道院長アラニバルは司教も兼ねており、ナバラのコルテスにも席を持っていたため、異端審問所が魔女を罰していたことを知っていた。その上でアラニバルがログローニョの裁判所に現況を伝え介入を求めたということは大いに考えられる[56]。

図６　スガラムルディの魔女博物館

図７　スガラムルディの教会

[54] Azurmendi Inchausti, M., *Las brujas de Zugaramurdi*, p. 71.
[55] Azurmendi Inchausti, M., *Las brujas de Zugaramurdi*, p. 72.
[56] Henningsen, G., *El abogado de las brujas*, p. 85.

これまでの経緯からスガラムルディの魔女狩りでは以下の特徴がみられる。

図８ ログローニョのアウト・デ・フェの容疑者リスト

グラシアナ・デ・バレネチェア	羊飼いフアネス・デ・イリアルテの妻。スガラムルディのアケラーレの女王。	80歳	女	ペルトラナ・デ・ラ・ファルガ	マルティン・デ・グアルテブルの妻。夫婦ともに貧しい物乞い。	40歳	女
ミゲル・デ・ゴイブル	羊飼い。グラシアナ・デ・バレネチェアとは姪と婿の親同士。アケラーレの王。	86歳	男	フアネス・デ・ランベルト	鍛冶職人	27歳	男
エステバニア・デ・イリアルテ	羊飼いフアネス・デ・ゴイブルの妻。グラシアナ・デ・バレネチェアの姪。	36歳	女	フアネス・デ・イリバレン	鍛冶職人	40歳	男
マリア・デ・イリアルテ	婚姻のための女性。グラシアナ・デ・バレネチェアの姪。	40歳	女	マリア・デ・ソサヤ・ララメンディ		80歳	女／独身
エステバニア・デ・ナバルコレナ	自作農ペトリ・デ・テレチェアの未亡人	80歳	女／未亡人	フアネス・デ・エチェギ	自作農	68歳	男
マリア・ペレス・デ・バレネチェア	フアネス・デ・ブルアの妻	70歳	女	マリア・デ・エチャレク	大工ペドロ・サインスの未亡人	40歳	女／未亡人
マリア・フアン	日雇い労働者フアネス・デ・サバギンテギの未亡人。	70歳	女／未亡人	フアネス・デ・オディア・イ・バレチェア	炭焼き・薪職人	60歳	男
マルティン・ビスカル	自作農	80歳	男	エステバニア・デ・ペトリサンセナ	自作農フアネス・デ・アスピルクエタの妻	37歳	女
マリア・デ・フレテギア	自作農エステベ・デ・ナバルコレナの妻	22歳	女	マリア・デ・アルブル	粉ひき小屋の善人フアネス・デ・マルティネナの未亡人	70歳	女／未亡人
フアナ・デ・テレチェア	粉ひき小屋の善人フアネス・デ・レクンベリの妻	38歳	女	マリア・バスタン・デ・ボルダ	自作農マルティン・デ・アルブルアの未亡人	58歳	女／未亡人
フアネス・デ・ゴイブル	羊飼いで、ミゲル・デ・ゴイブルの息子。アケラーレの太鼓叩き。	37歳	男	マリア・デ・エチャチュテ	フアネス・フランセスの未亡人	54歳	女／未亡人
フアネス・デ・サンシン	アケラーレのアタバル奏者の従兄弟であるサンシンの息子。	20歳	男	グラシアナ・サラ	羊飼いマルテン・デ・ボルダの未亡人。ウルダックス救貧院の職員。	67歳	女・未亡人
マリア・プレソナ	マリア・フアンの姉妹であると推定される。	70歳	女／独身	ペトリ・デ・フアンゴレナ	自作農	37歳	男
マリア・チピア・デ・バレネチェア	大工サバト・デ・サライエタの妻	52歳	女	ドミンゴ・デ・スピルテギ	炭焼き	50歳	男
マリア・デ・エチェギ	自作農マルティン・デ・マチゴレナの妻	40歳	女	ペドロ・デ・アルブル	司祭でウルダックスのプレモントレ会の修道院の修道立願者。マリア・デ・アルブルの息子	43歳	男
				フアン・デ・ボルダ・イ・アルブル	聖職者でペドロ・デ・アルブルの従兄弟。マリア・バスタン・デ・ボルタの息子。スガラムルディ出身	34歳	男

a）親族関係

スガラムルディにあった46の家のうちの三分の一すなわち16が迫害に苦しめられた。シミルデギの告発により、ログローニョの地下牢に1609年１月に連れていかれた最初の４名は婚姻による親族関係にあり[57]、1609年新年の恩赦の儀式に出た９名の人間の属する７つの家族は、血縁もしくは婚姻関係にあり、最終的に20人の家族が投獄され、有罪となった。

[57] Azurmendi Inchausti, M., *Las brujas de Zugaramurdi*, p. 69.

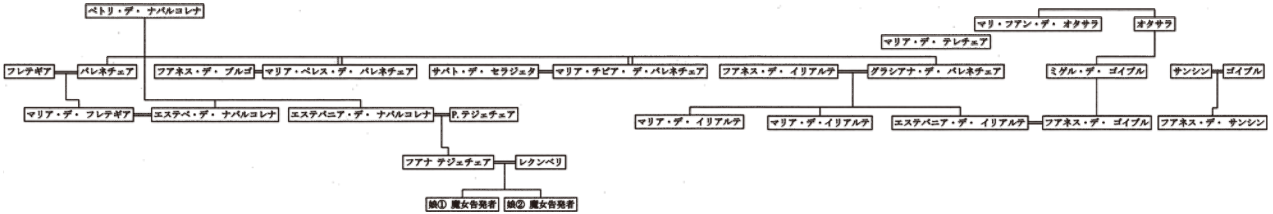

ペトリ・デ・ナバルコレナ
マリ・フアン・デ・オタサラ
オタサラ
マリア・デ・テレチェア
フレテギア
バレネチェア
フアネス・デ・ブルゴ
マリア・ベレス・デ・バレネチェア
サバト・デ・セラジェタ
マリア・チビア・デ・バレネチェア
フアネス・デ・イリアルテ
グラシアナ・デ・バレネチェア
ミゲル・デ・ゴイブル
サンシン
ゴイブル
マリア・デ・フレテギア
エステバ・デ・ナバルコレナ
エステバニア・デ・ナバルコレナ
P.テジェチェア
マリア・デ・イリアルテ
マリア・デ・イリアルテ
エステバニア・デ・イリアルテ
フアネス・デ・ゴイブル
フアネス・デ・サンシン
フアナ テジェチェア
レクンベリ
娘① 魔女告発者
娘② 魔女告発者

図９ 親族関係

その20人のうち10人はイリアルテア、ゴイブル、サンシン、バレネチェア、大工一族のブルガの家の親族であり、残り６人がテジェチェア、ナバルコレナ、スルテギアの親族、４人がアルブルとボルダの家族で60代のマリア・プレソナとマリ・フアントの姉妹はイパラギレの家の出身である。46歳のマリア・ペレス・デ・バレネチェアと52歳のマリア・チピアはおそらく姉妹で、80代のグラシアナ・デ・バレネチェアはおそらく義姉妹であった[58]。グラシアナ・デ・バレネチェアは異端審問官の前で、魔女術は母のマリア・デ・テレチェアから学び、同様に彼女自身も二人の娘マリアとエステバニアに教えたと話したが、フアネス・デ・マリゴレと結婚している三人目の娘のマリアは魔女ではなかったとしている。エステバニア・デ・イリアルテは末の二人の息子を魔男にしたと告白した。ミゲル・デ・ゴイブルは母方の叔母マリ・フアン・デ・オタサラが魔女術を始め、自分は息子のフアネス・デ・ゴイブルと甥のフアネス・デ・サンシンに魔女術を教えたと断言した[59]。このようにスガラムルディの魔女はヨーロッパ共通のモデルに従い魔女術が特定の家族の中で学ばれている。

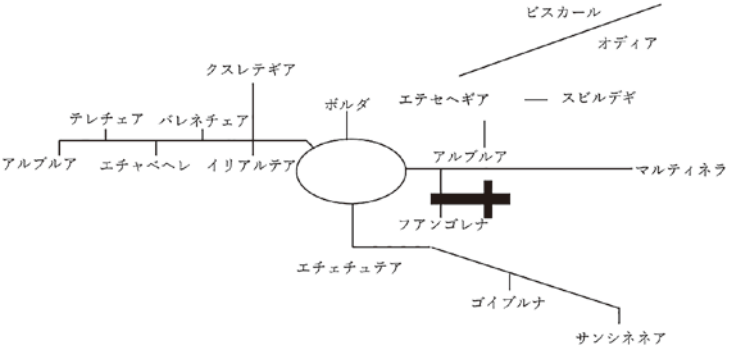


図10 被害者の家の所在

b）アゴテ

スガラムルディの魔女迫害の被害者の多くがアゴテ（agoteもしくはカゴcagots）と呼ばれる職業による被差別民であった。アゴテの起源については、巡礼最盛期のサンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路で９－10世紀に建築ブームに

[58] Henningsen, G., *El abogado de las brujas*, p. 59.
[59] Henningsen, G., *El abogado de las brujas*, p. 60.

おけるギルドの内紛の際に失職した石工の集団という説がある[60]。1513年に200名以上のアゴテがパンプローナ、バジョーナ、ウエスカ、ハカそしてダクスの司教区を訪れ、選出されたばかりの教皇レオ10世にアゴテの社会的排除の終息を請願した。ナバラ当局に対して1515年にレオ10世が、1524年にはカール５世が1519年と1548年にも繰り返しアゴテと他の住民を対等に扱うよう法律を制定するよう命じた。しかし厳しい処罰と罰金が課されたにもかかわらず、この命令により改善されたのは、アゴテであることを公式文書で触れないことと、アゴテをカゴといったそれとわかる呼び方で記載しないことのみであった。ナバラ当局は、民法上平等に扱うことを避けるためアゴテを外国人で構成されているとみなし、そして村落への入国や居住に許可証を要求し、家々から追い出す目的でそれを更新できないようにするなど[61]、アゴテの隔離は継続した。

また当時の台帳において村の中に存在が確認されなかった所有者の家に住んでいる最下層の存在があり、サンシネネア、カパギンデギア、マラバスタ、マルティネナ、エルサペア、スビルデギア、エチェチュテ、イトゥリ、イパラギレ、ドラレ、サガルディらは、定まった収入のないアゴテであった。サンシネネアの家は、如何なる賃料も発生しない掘っ建て小屋で、持ち主不在であるとされた。主不在の極貧の家のもう一つの例はエチェチュテで、主は２年前にログローニョで火刑に処されていた[62]。彼らは、篩職人、レンガや石積み職人、大工、靴職人、粉ひき小屋の番人、荷鞍職人、籠職人、炭焼きといった仕事で雇われており、土地も羊も所有しておらず、また仕事に必要な木材、鉄、布地、柳の小枝、麻なども持っていなかった。公証人によると、これらの人々の経済力は不明で、自分の作った工芸品を食事や薪、幾ばくかの貨幣と交換して、日雇いで生活していたと記されている[63]。

スガラムルディの魔女の中にはエチェチェギア家の息子と娘がおり、娘の方はウルダックスのマチンゴレナ家の農夫と結婚した。また貧しいアゴテで納税が４レアルのフアンゴレナ家の若い息子、バレネチェアの姉妹である大工の妻も最初の逮捕者の一群としてログローニョに送られた。ビスカレコレナの家の老家長や、フランスのエスペレタ出身のスビルテギ家の炭焼きも逮捕された。

---

60 Robb,G., *The Discovery of France*, W. W. Norton, 2007, p. 40.
61 Azurmendi Inchausti, M., *Las brujas de Zugaramurdi*, p. 75.
62 Azurmendi Inchausti, M., *Las brujas de Zugaramurdi*, p. 69.
63 Azurmendi Inchausti, M., *Las brujas de Zugaramurdi*, pp. 67-8. この時代の石積み職人や大工は、専門的な技術で丸二日間働いて11レアル以下、すなわちパンひと塊もしくは一匹の山羊に相当する収入のみを得ていた。

夫のフアネスがサン・ジャン・ド・リュズ出身のフランス人である極貧のエチェチュテア家の女主人も、1610年のアウトで公開火刑された。この夫婦は1613年の土地台帳では不在であったため[64]、居住許可が更新されなかったことが推定される。魔女迫害は国境を接するフランスとも連動しており、ランクルが『堕天使と悪魔の無節操一覧』で記しているように、起訴された魔女の中には、アムールの物乞いのベルトラナ・デ・ラ・ファルガ、フランス側のギプスコアのラバスティダ出身の鍛冶職人のフアネス・デ・ランベルト、エスペレタから来た炭焼きのドミンゴ・デ・スビルテギなどフランス側のピレネーを出自とするアゴテが目立つ[65]。スガラムルディの魔女には社会的格差やアゴテやよそ者に対する差別の側面があるといえる。

c）羊飼いのギルド

スガラムルディの魔女狩りには人間関係や利害関係が背景にあるが、羊飼いギルドの魔女が目立つのも共同体内の利害が関係している。「アケラーレの王」とされたミゲル・デ・ゴイブルとフアネス・デ・ゴイブルは、羊飼いのみに従事する納税額４－12レアルの下層に属し、一年に羊一匹にもならなかった。ゴイブルをはじめとするスガラムルディの何人かの羊飼いは異端審問所により「封建的な義務から30年前に解放されていたにせよ、修道院の羊の群れを放牧させなければならない」と判決を下されていた[66]。ミゲル・デ・ゴイブルが投獄された際、彼自身の保有する羊は17頭で雌のうち一匹のみが妊娠しているのみであった。ここからウルダックスの修道院がここの羊飼いとの間に「羊の持ち主と羊飼いの間で羊の増加分を半分に分ける」という世俗法を守っていなかったことが推定される。文書には羊の持ち主であるアラニバル修道院長と羊を放牧していた羊飼いのゴイブルとの間の不利益については何も触れられていないが、修道院長の極貧の羊飼いへの惨い仕打ちは、恒常的なものであったと考えられる。既に無効となっているはずの修道院長への封建的な義務からの解放は非常に緩慢で[67]、ミゲル・デ・ゴイブルはウルダックス修道院の羊の放牧義務から

---

[64] Azurmendi Inchausti, M., *Las brujas de Zugaramurdi*, pp. 72-73.
[65] Henningsen,G., *El abogado de las brujas*, p. 45.
[66] Azurmendi Inchausti, M., *Las brujas de Zugaramurdi*, p. 66.
[67] Azurmendi Inchausti, M., *Las brujas de Zugaramurdi*, p. 67. スガラムルディの経済的状況は近隣の他のナバラの村落と比べると貧しく、例えばスガラムルディと比較しやすい、65の家屋に36名の住民のいるアラナスの91％の住民が年平均11レアルの課税対象となる地代収入を得ているのに対し、スガラムルディは７レアル半にも満たなかった。

の解放に全ての労力を傾注していた。

また、スガラムルディの９名の逮捕者のうちの４名が比較的裕福なボルダとアルブルアの２家の出身者であることが目を引く[68]。犠牲者の母は義姉妹の未亡人で、息子はそれぞれアラニバル修道院長とともにミサを上げる司祭であるアルブルア＝ボルダで、もう一人がウルダックスのプレモントレ会の修道士であるアルブルアである。アルブル＝ボルダの方はボルダ家の出身で、母の義姉妹はアルブルア家出身で、マルティニェナ家の粉ひき小屋の番人と結婚した。この粉ひき小屋の番人が亡くなった後、実家であるアルブルア家に息子と共に戻り、この息子は間もなくウルダックスの修道院に修道誓願を立てた。この息子の名字はマルティニェナだったが、全ての住民は彼の母と同じアルブルと呼び、文書にもそのように記載されていた。このことはマルティニェナの名が、粉ひき小屋を借りて水をくみ上げていた８レアルを納税する貧しく、若くして亡くなったアゴテを指していたことがわかる。この少年は幼少期と思春期のほぼ全てを、母が戻ったアルブルアの家で過ごした。レオン・デ・アラニバル修道院長とアルブルア＝ボルダ家のミサ司祭との軋轢がある中、共に育った従兄弟同士はすべての面において支援しあった。ログローニョでは、二人の逮捕が喜ばれた。それは彼らが「カスティーリャ語を話すことができたから」であり、彼らを介して異端審問官が「魔女のセクト」のより正確な情報が得られると考えられたからである。

スガラムルディと異なり、ウルダックスの特徴は44の家々とその数多い使用人、12名の修道士からたった３人のみが火刑に処された点である。ウルダックスは当時住民から選ばれた議会がなく、判事と頭領は双方とも修道院に押さえられていた[69]。そこからレオン・デ・アラニバル修道院長によるスガラムルディへの報復を動機とした動きが浮かび上がってくる。ウルダックスの３人は、グラシアナ救貧院で働いていた66歳の羊飼いの未亡人で、魔女であることを否定し続け、生きたまま火刑に処された。他の二人は地下牢でチフスにより亡くな

---

[68] Azurmendi Inchausti, M., *Las brujas de Zugaramurdi*, p. 66. 台帳を見ると比較的よい経済状況にあったのは牧畜との兼業農家で、エチェベリア、ボルダ、アルブルア、エチェニケア、レクベリア、テジェチェ＝ベエレア、テジェチェ＝ガラジャ、スルテギア、イリゴジェン、サラレネアとカタリネネアの家が最も裕福で、１デュカードから１デュカード半の税を納めていた。スガラムルディで最も裕福な家は年に66kgの小麦すなわち羊二頭相当の税を納めていた。この時代の住民間の経済格差は大きく、アラニバル修道院長はスペイン王権から200デュカードの年金、6000kg以上の小麦すなわち200頭の羊ないしは29頭の牛、耕作用の牛15頭、大ハンマー７つに相当する地代収入を得ていた。

[69] Azurmendi Inchausti, M., *Las brujas de Zugaramurdi*, p. 75.

り、代わりの人形が火刑に処されたが、一人はマリア・デ・エチャレクという40歳の未亡人で、ペドロ・サエンスという大工を家長とする極貧の家の人間だった。この家もまた台帳作成の際に「主不在」とされており、恐らく居住許可を更新されなかったアゴテである。もう一人の被害者はエステバニア・デ・ペトリサンセナで農民のフアネス・デ・アスピルクエタが夫であった。ウルダックスにペトリサンセナとアスピルクエタという家は存在しなかったため、他の村から結婚してから来たよそ者だったと考えられる[70]。

d）幼児殺害

ログローニョのアウト・デ・フェで読み上げられた罪状では幼児殺害が最も多い。近世社会では貧しさゆえに高い割合で全ての子供を育てることができず、カスティーリャ・ラ・ヌエバ、クエンカ、アルカラ・デ・エナーレス、マドリッドなどは生きるのに苛酷な環境の下、親は2，3人の子供のみしか生かすことができなかった。スガラムルディでも幼児殺害の大半が容認されていた。生後6か月たたなければ人間ではなく、死んでも罪にはならないとされ、酔っ払った母親が子供と寝て、寝返りで窒息させるか寝台から落として死なせ、このような幼児の死は、魔女のせいとされ、母親が魔女とされることもあった。また酔っ払った母親によってつぶされて窒息しかかっているところを父親がベッドから長男を救い出すこともあったことから、ワイン蔵からワインを盗み出す泥棒や酔っ払いも魔女とされた[71]。スガラムルディの主要な財源は農業だが、気候が苛酷で春ですら夜は凍えるほど冷たく、雹が叩きつけることもしばしばであった。そしてカスティーリャで熱風と呼ばれる南風が小麦に襲い掛かり、麦の穂は痩せ、穀粒がなくなる代わりに黒ずんで悪臭漂う黄色い粉で一杯になるなど、貧しく日々生きるだけで精いっぱいだったことが伺われる。

スガラムルディでは、魔女たちは敵の子供たちに復讐をしたとされ、スガラムルディの住人にとって子供が理由もなく突然死ぬことは、説明できない偶然でもなく、運が悪いことでもなく、「悪しき人物」によるものであり[72]、グラシアナ・デ・バレネチェア、ミゲル・デ・ゴイブル、エステバニア・デ・イリアルテ、マリア・デ・イリアルテの4名だけで18件の幼児殺害と11件の殺害につ

---

[70] Azurmendi Inchausti, M., *Las brujas de Zugaramurdi*, pp. 74-75.

[71] 2019年11月30日於慶應義塾大学日吉キャンパスMaría Jesús Zamora Calvo（マドリード自治大学マドリード自治大学分文哲学部スペイン文献学科教授）講演

[72] Henningsen, G., *El abogado de las brujas*, p. 52.

いて罪を問われている。また他の魔女たちに付き添われて、収穫物や住民の家畜へ与えた損害についても責を負わされている[73]。

グラシアナ・デ・バレネチェアは、男性が切ったばかりの薪の山から、他の魔女に付き添われて薪を抜き取っていたところを、男性に驚かされ殴打を喰らわされたことに復讐するために、その娘である４歳の女の子を殺害したことを自白した。また老女グラシアナは、ある夫婦の雌鶏を盗んだとして告発されたので、数日後雛鳥をもって現れたが許されなかったため、その娘を殺した。第三の幼児殺害は、グラシアナの農園に豚の群れを放し、リンゴ酒を作るための沢山のリンゴを台無しにした夫婦に復讐するため、魔女術によってその息子を殺害した。

76歳の羊飼いであるミゲル・デ・ゴイブルは、30年前に彼の姉妹の小さな娘を殺したと告白している。夜に魔女たちと姪の部屋に入り、彼女を齧り、血を吸ったとし、この幼児殺害については村全体が証言をした。なぜなら朝に体中に黒い痕とともに揺り籠に寝ているのを発見されたのを村中で見に行ったからである。虐待された娘は数日後に亡くなった。子供の母親は兄弟であるミゲルに文句を言い、彼女の小さな娘の血を吸った魔女は彼以外に考えられないと言ったが、彼は何も知らないかのごとくふるまった。またさらに10年後ゴイブルはある未亡人の小さな息子の血を吸いに魔女たちと赴いた。また家畜の売買契約で悪しき仲買を父親が行ったため、ウルダックスで一歳の子供を殺したと白状している。

エステバニア・デ・イリアルテは、1604年に隣人がパンを焼くために竈を使わせてくれたのだが、その家の息子がパンのうちの一つを食べてしまった。エステバニアは激怒し長男を急性扁桃腺に罹らせ20日間苦しめたと供述している。マリア・デ・イリアルテは、1606年に他の魔女たちと一緒に、ナイフで脅してりんごを盗んだ隣人の家に入った。眠っていた隣人の口に粉薬を放り込んだが、その隣人が一晩中吐かなければ、助からなかっただろう。翌朝、犠牲者の妻が皆に前夜死ぬところだったと話した。マリア自身、姉妹のエステバニアと母の老女グラシアナと共犯の殺人未遂を認めた。また、マリア・デ・イリアルテは自分で９人以上の幼児殺害を行ったが、母と姉妹は関与していないと供述した[74]。グラシアナ・デ・バレネチェア、エステバニア・デ・イリアルテ、ミゲル・デ・ゴイブルは獄中でチフスにより亡くなり、しばらくしてマリア・デ・イリ

[73] Henningsen, G., *El abogado de las brujas,* p. 50.
[74] Henningsen, G., *El abogado de las brujas,* p. 108.

アルテも1610年のアウト・デ・フェの前に亡くなった。

e）「老いた、独身もしくは未亡人で孤独な、醜く、病気」（vieja, sola, fea, enferma）の女性

ランクルがフランスで迫害した魔女には男もいたが、どの地域でも１～２割を超えることはほとんどなかった[75]。しかし1610年11月のログローニョのアウト・デ・フェで刑に処された31名のうち39％が男性であり、スガラムルディでは魔女が必ずしも女性であったとはいえない。ただ女性のなかで未亡人の割合が多い。これは核家族化により、息子が母親の面倒を見るのを拒絶し、45歳以上になると子供を産むことができず、生産的な仕事をするにはあまりに貧弱で貧しい、「死ぬ以外どうしようもなくなる（no valía más que para morir）」と見なされた老女を異端審問所に訴え、死刑とする[76]とする、スペインの全体的な傾向に当てはまる。

グラシアナと二人の娘はしばしば住人と口喧嘩をしていることについて直接訴えられなかったが皆が見ており、または時折物を盗んでいた。この三人の女性は口やかましく攻撃的な性格で隣人とうまくやっていけず、共同体の誰からも共感を得られない「悪しき隣人」と呼ばれるような存在であると認識されていた[77]。農村社会では、孤独な悪しき隣人は魔女と同義語だったのである[78]。

f）アケラーレ

アケラーレについて最初に供述したのはエステバニア・デ・イリアルテで、「悪魔が長い間告白を妨げたが今は神が真実を話す力を与えてくれた」と、ベセラとバジェにより1609年４月12日から19日の尋問で引き出された。エステバニア・デ・イリアルテの後に姉妹のマリア・デ・イリアルテが「ホアン・ガイコア（Jaun Gaicoa）という悪しき主人が絶え間なく何も告白させまいとした。母のグラシアナ・デ・バレネチェアにより２歳の時から魔女になった」[79]と告白したがこれもベセラとバジェによって引き出された。ホアン・ガイコアはバスク語でキリスト教徒の神を意味している。また６人の魔女たちは自分たちの神を

---

[75] 池上俊一『魔女と聖女』講談社現代新書、1992年、23頁。
[76] 2019年11月30日於慶應義塾大学日吉キャンパスMaría Jesús Zamora Calvo（マドリード自治大学マドリード自治大学分哲学部スペイン文献学科教授）講演
[77] Henningsen, G., *El abogado de las brujas,* p. 50.
[78] Henningsen, G., *El abogado de las brujas,* p. 51.
[79] Henningsen, G., *El abogado de las brujas,* p. 107.

セニョールと呼んでいた。ミゲル・デ・ゴイブルはそれが「黒い肌で恐ろしい目をし、ロバの鳴き声のような深い声をし、質の高い黒衣を纏い、身体は醜悪で頭には雄山羊の角が生えていた。手は鶏の足のようで指は骨ばっており獲物を強奪する猛禽のような鉤爪をしていた。足は雄のガチョウのようで、身体は時折男性のようで、べつの時は雄山羊のようで、他の時は角のない男性のようだった」と述べている[80]。

グラシアナ・デ・バレネチェアは悪魔が大変な悪臭を放っており、娘のマリア・デ・イリアルテは、二本の長い角と冠のように頭の周囲に短い角が生えていたと述べている。その姉妹のエステバニアは２本の角しかなく、一本は額にもう一本は襟首に生えていたとするなど、角の大きさや数についてはかなりの食い違いがみられる。マリア・デ・イリアルテはしなやかな肘掛のついた黒い椅子だと述べているが[81]、大体の供述で悪魔は椅子に座っていたということは一致している。

ヘニングセンによると、スガラムルディでの黒ミサによりスペインのサバトは完成し、ログローニョのアウト・デ・フェの報告書でその詳細が記されている。アケラーレでは、祭服と祭壇用具、侍祭、司教の服を身に纏った悪魔、告解、「低く、かすれた声で、悲しげに」歌う聖歌、悪魔が描かれた黒いホスチアと黒い聖杯と左手の祝福で聖別したとあるが[82]、これは、マルティン・デ・カスタニェガの述べたカトリックの典礼の反転にあたり、豊穣儀礼というよりは『魔女の鉄槌』のようなテキストに依拠して確立されたものであるといえる[83]。サバトの場所はセイラムの魔女のように都市空間から離れた水のある場所で催されるが、スガラムルディも同様であった。

---

80 *The Salazar Documents,* p. 127.
81 Henningsen, G., *El abogado de las brujas,* p. 116.
82 Henningsen, G., *El abogado de las brujas,* pp. 128-129.
83 Usunáriz Garayoa, Jesús Mª, “La caza de brujas en la Navarra moderna (siglos XVI-XVII)”, *Revista Internacional de los Estudios Vascos* (2021), pp. 307-350, p. 325.

図11 アケラーレの催された洞窟（2019年８月筆者撮影）
図12 アケラーレの催された牧草地（2019年８月筆者撮影）

1609年６月20日にアロンソ・デ・サラサール・フリアスがバジェとベセラに続き３番目の異端審問官となったが、サラサールは８か月の間に魔女だと推定されている1802人に尋問し、アケラーレの妄想が実在しないことを検証した。悪魔と肉体関係を持った少女については医師の診断を受けさせて処女性を確認した。また軟膏や呪いの煎じ薬を分析させ、無害であったとした。サラサールは1610年のログローニョの裁判で３人の裁判官のうちの一人となったが、1609年から1614年にかけて5000頁以上に及ぶ報告書を準備し、「何らかの魔女術を行ったであろうと推定される行為は一つもないこと」「彼女たちが供述し、記述するまでは魔女も魔女術もなかった」ことを様々な証拠で立証した。ヘニングセンは、供述したような夢は事前の教化によるものとし、フランス側とスペイン側の人間の行き来が非常に多かったことから、噂であったり、説教師による説教もあったりしたことによることが推測されるとしている[84]。サラサールは伝統的な異端審問官とは異なり、ヨーロッパの魔女狩りの歴史において初めて、拷問も強要もせずに犠牲者の何百という尋問に基づいて調査を行った優れた異端審問官であったといえよう。ログローニョのアウト・デ・フェでは訴えられた容疑者の中で、６名が生きたまま火炙りにされ、13名が獄死し、12名が拷問にもかかわらず挫けず魔女であることを否定し、２名の聖職者の親戚は10年にわたり追放され、18名が減刑されているが、このようにスガラムルディの被害者がフランスと比べると驚異的に数が少なかったことは特筆すべきことだろう。

[84] Jimeno Aranguren, R., “Gustav Henningsen o el porqué del studio de la Inquisicion”, *Revista Internacional de los Estudios Vascos* (2021), pp. 23-39, p. 25.

魔女迫害の少なさについては、スペイン的な事情があったわけではないが、異端審問所は訴訟手続きに労を惜しまず、告発された人物が本当に魔女であるという納得のいく証明を得ることが難しいことを早くから理解していた。スペインでは異端審問官は、その管轄内で証拠を精査し、論理的枠組みを作って訴追し、宗教的分派に優先順位をつけることに経験を積んでいた[85]。したがって異端審問所は、魔女に対する告訴に対しては極めて慎重に対応し、地域の世俗権力が同様の姿勢を取るように腐心したことも被害の少なさにつながったと考えられる。

全ての異端審問官がサラサールの革新的な理論に賛同していたわけではない。バジェとベセラは1613年に空中飛行やアケラーレ、魔術などの魔女自身の供述による実在を擁護し、『魔女の証明された行為』としてまとめ反駁しようとした。しかし異端審問所によりログローニョでは過ちが犯されたと認識され、魔女狩りの終息宣言が出された。

4．アレックス・デ・ラ・イグレシア監督『スガラムルディの魔女』(2013年)

スガラムルディの魔女についての報告書は、事後に何度も印刷・再版され、文学や芸術に多大な影響を与えてきた。戯曲家で詩人のモラティンは1610年のアウト・デ・フェの報告書に注釈をつけており、友人であるフランシスコ・デ・ゴヤの「アケラーレ」にインスピレーションを与えたことが推測される。また小説家ピオ・バロッハも『ウルトビの貴婦人』を書くにあたって、ログローニョのアウト・デ・フェの報告書とランクルの著作を読んでいる[86]。

---

[85] ジェフリ・スカール、ジョン・カロウ（小泉徹訳）『魔女狩り』岩波書店、40－41頁。

[86] Caro Baroja, J., “De nuevo sobre la historia de la brujería (1609-1619)”, *Príncipe de Viana,* Nº 206, 1995, pp. 741-802, p. 744.

図13 フランシスコ・デ・ゴヤ「アケラーレ」(1798年) が表紙のピオ・バロッハ『ウルトビの貴婦人』(1916年)[87]
図14 フランシスコ・デ・ゴヤ「異端審問所のアウト・デ・フェ」(1819年)[88]

ミッシャンブレは「集団的想像界という複雑なシステムを理解するのは、多種多様な証言を集めることが不可欠で、歴史家が利用すべき資料は古典的な手稿原典よりも、遥かに広範なものでなければならない。文化を研究する場合は、代表的な美術作品や「大いなる伝統」を背負っている文化のみならず、第七芸術たる映画などのあらゆる伝達媒介を等しく重要と見なす必要がある」[89]と述べている。

2013年に公開された映画『スガラムルディの魔女』の監督アレックス・デ・ラ・イグレシアは、1610年のログローニョのアウト・デ・フェに関する文献を読み込み「スガラムルディはセイラムのようなもので、皆が知っているべき場所。スガラムルディの洞窟から魔女術が生まれている」[90]と主張している。『スガラムルディの魔女』は、同監督作品の中で最もヒットした映画で、興行収入は約５億円にのぼり、2014年の第28回ゴヤ賞では10部門にノミネートされ、最多の８部門で受賞した。またブリュッセル国際ファンタスティック映画祭ではインターナショナル・コンペティション部門に出品され、作品賞を受賞、第34回ファンタスポルトでは特殊効果賞を受賞するなど、広く受け入れられている。

---

[87] https://librosdeayeryhoy.files.wordpress.com/2014/09/61-la-dama-de-urtubi.jpg（最終閲覧日２月８日）

[88] https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/d/dd/Francisco_de_Goya_-_Escena_de_Inquisición_-_Google_Art_Project.jpg（最終閲覧日２月11日）

[89] ミッシャンブレ、ロベール（平野隆文訳）『悪魔の歴史　西洋文明に見る闇の力学　12〜20世紀』大修館書店、2003年、６－７頁。

[90] http://www.rtve.es/alacarta/videos/telediario/estos-dias-se-rueda-navarra-pelicula-brujas-zugarramurdi-alex-iglesia/1547142/（最終閲覧日２月８日）

アレックス・デ・ラ・イグレシアは1965年にバスク州のビルバオで生まれた。子供の頃からデッサンやイラストに熱中し、1980年代にはすでに同人誌や雑誌、日刊新聞の漫画のデザイナーや脚本家として働き、1981年にビスカヤの中心地インダウチュにある文化団体エル・デスバンから彼の初めての作品が出版された。1981年から1985年の４年間同人誌*No*や、ポリドリというペンネームを用いて日刊新聞『ガセタ・デル・ノルテ』に漫画を描いていた。PNV（バスク民族主義党）の雑誌エウスカディに寄稿しており、バスクの事情や文化にも通暁していた。ビルバオのデウスト大学で哲学の学位を取得後、1988年パブロ・ベルヘル監督『ママ』、1991年エンリケ・ウルビス監督『全ては金のため』（*Todo por la pasta*）で美術監督を務め、同年に短編映画『ミリンダ殺人』（*Mirindas Asesinas*）を製作した。1992年には『ハイル・ミュタンテ！電撃XX作戦』で長編映画デビューし、３部門のゴヤ賞を獲得した。1995年から映画プロデューサーのアンドレス・ビセンテ・ゴメスと協力し、出世作となる『ビースト　獣の日』を製作した。この映画で６部門のゴヤ賞を獲得し、ベネチア、シッチェス、トロント映画祭で批評家と満場からの拍手が送られた[91]。

図15 アレックス・デ・ラ・イグレシアのフィルムグラフィー

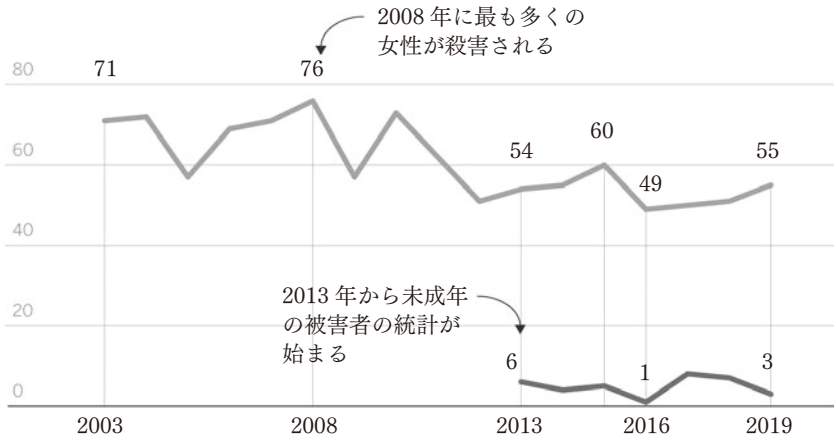
公開年	タイトル		主な受賞	興行収入
1993年	Acción mutante（ハイル・ミュタンテ!/電撃XX作戦）	監督・脚本		1,500,000€
1995年	El Día de la bestia（ビースト 獣の日）	監督・脚本	第10回ゴヤ賞でアレックス・デ・ラ・イグレシアが監督賞、サンティアゴ・セグラが助演男優賞、ホセ・ルイス・アリサバッガ・ビアフラが美術監督賞、ホセ・ケトグラス、ホセ・アントニオ・サンチェスがメイクアップ&ヘアイスタイリング賞、ミゲル・レバス、ジレス・オルション、ホセ・アントニオ・ベルムデス、カルロス・ガリド、レイ・ギジョンが音響賞、レイジェス・アバデス、ファン・トミニク、マヌエル・オリージョが撮影効果賞を受賞。	4,500,000€
1995年	Perdita Durango（ペルディータ）	監督		2,600,000€
1999年	Muertos de risa（どつかれてアンダルシア（仮））	監督・脚本		6,300,000€
2000年	La Comunidad（13 みんなのしあわせ）	監督・脚本	サン・セバスティアン国際映画祭でカルメン・マウラが主演女優賞、第25回ゴヤ賞でカルメン・マウラが主演女優賞、助演男優賞をエミリオ・グティエレス・カバが受賞、フェリクス・ベルジェス、ラウル・ロマニージョ、パウ・コスタ、フリオ・ナバロが撮影効果賞受賞。	7,000,000€
2002年	800 balas（マカロニ・ウエスタン 800発の銃弾）	監督・脚本・製作		4,000,000€
2005年	Films to Keep You Awake: The Baby's Room（スパニッシュ・ホラー・プロジェクト ベビー・ルーム）	監督		
2008年	The Oxford Murders（オックスフォード殺人事件）	監督・脚本・製作	第23回ゴヤ賞でロケ・バニョスがオリジナル音楽賞、アレハンドロ・ラサロが編集賞、ロサ・ロメロが製作者賞を受賞	8,200,000€
2010年	Balada triste de trompeta（気狂いピエロの決闘）	監督・脚本	ヴェネツィア国際映画祭でアレックス・デ・ラ・イグレシアが銀獅子賞と金オゼッラ賞受賞。ゴヤ賞では、ホセ・ケトグラス、ペドロ・ロドリゲス、ニニベス・サンチェス・トレスがメイクアップ&ヘアイスタイリング賞、レイジェス・アバデスとフェラン・ビケが特別効果賞受賞。	2,300,000€
2011年	La chispa de la vida（刺さった男）	監督		850,00 €
2013年	Las brujas de Zugarramurdi（スガラムルディの魔女）	監督・脚本	第28回ゴヤ賞でテレレ・パベスが助演女優賞、パブロ・ブランコが編集賞、アルトゥーロ・ガルシア、ホセ・ルイス・アリサバラガが美術賞、カルロス・ベルナセスが製作者賞、パコ・デルガードが衣装デザイン賞、マリア・ドロレス・ゴメス・カストロ、ハビエル・エルナンデス・バレンティン、ペドロ・ロドリゲス、フランシスコ・J・ロドリゲス・フリアスがメイクアップ&ヘアスタイリング賞受賞。チャーリー・シュムクラー、ニコラス・デ・プルビケが音響賞、フラン・ラモン・モリナ、フェラン・ビケが撮影効果賞を受賞。	4,090,000€
2014年	MESSI（メッシ-頂点への軌跡）	監督		17,113,00 €
2015年	Mi gran noche（グラン・ノーチェ！最高の大晦日）	監督・脚本		2,510,000€
2017年	El bar（クローズド・バル 閉角の狂騒手と名人の探偵）	監督・脚本		2,880,000€
2017年	Perfectos desconocidos（大人の事情）	監督		3,000,000 €

[91] Pérez Franco, N., “La intertextualidad en el cine de Álex de la Iglesia: El caso de Cómic”, *Revista Cientifica de Cine y Fotografia,* 2010, pp. 41-43.

アレックス・デ・ラ・イグレシア監督作品には、史実や現実社会をブラックユーモアやパロディを用いて批判する傾向が見られる。スペインの民主化への移行期が扱われた1999年の『どつかれてアンダルシア（仮）』では、1981年にスペインで起こった軍事クーデター未遂事件やバルセロナオリンピックが扱われている。『マカロニ・ウエスタン800発の銃弾』では、当時の映画界への批判、またバスクの政治や文化にも触れられている。『気狂いピエロの決闘』はスペイン内戦とフランコ独裁政権末期を背景としている。『刺さった男』ではスペインのゴシップ報道の実情を批判し、『クローズド・バル　街角の狙撃手と８人の標的』ではエボラ出血熱感染拡大への対策を揶揄している。

『スガラムルディの魔女』もまた史実をベースに製作され、主演のウゴ・シルバは「創作された世界ではなく、我々が生きている現実」[92]であると述べている。デ・ラ・イグレシア監督は『スガラムルディの魔女』が、性別間の戦争を主題とし、現在スペインで大きな問題とされているマチスモ（男性優位主義）に端を発する様々な女性差別を批判するフェミニズム映画だと位置づけている。

図16 スペインにおいて恋人もしくは元恋人に殺害された女性の数[93]



[92] http://www.rtve.es/alacarta/videos/dias-de-cine/dias-cine-brujas-zugarramurdi/2033554/（最終閲覧日２月８日）

[93] El País　2020年 ２月２日の記事から作成。https://elpais.com/sociedad/2020/01/01/actualidad/1577902781_933560.html （最終閲覧日2020年２月８日）

またデ・ラ・イグレシア監督は男性にとって女性は愛と恐怖の対象であるとし、「この作品を見ると女性と言うのはとても魔女的な要素を持っていて、男性が如何に間抜けなのかということがわかるかと思う」と解説している。「物質的なものに支配されている馬鹿な男性に対して、男のあばら骨の一本ではなく、独自の世界を築きあげているのが女性で、馬鹿と悪女では悪い方がずっといい。男女が平等になるためには男は拷問にかけられるべき。男と女は対立から愛が生まれるのでは」と独自の男女観を述べている。社会の現実を嗤う独自のブラックユーモアについては「パーティーで笑うより葬式で笑う方が楽しい」と例えながら、女性二代と同居した家庭環境、つまり常軌を逸して裸で「私を殺す気だろう」と叫び、孫を恋人だと思い込んで追い掛け回す祖母と、施設ではなく自宅で祖母の面倒をみていた画家の母について、当時は面白くなかったが、緊張と苦悩の中にこそ笑いがあり、今となっては面白く感じる、そしてシュルレアリスムは人生の一部であるとしている[94]。

『スガラムルディの魔女』は、『魔女』[95]『クルーシブル』[96]『ウィッチ』[97]といった中央ヨーロッパやセイラムにおける典型的な魔女像を忠実に再現しようとした映画とは大きく異なっており、独自のアダプテーションがなされている。デ・ラ・イグレシアは『スガラムルディの魔女』を『ビースト　獣の日』の宗教批判の延長線上にあると述べている。『ビースト』では、バスクの聖職者が反キリストと対峙するため悪魔に近づこうとし、十字架を外し、慣れない煙草を吸い、本を万引きするなど悪事を重ねるという反転をさせている。近年の『クローズド・バル　街角の狙撃手と８人の標的』ではバルに魔女のような老女が現れ、それと対立関係となる乞食がパイプを持って聖句を唱えながら下水管の中を進んでいく姿により、十字の杖を持ち川を歩く洗礼者ヨハネと、血の滲んだ腰巻をつけてイエス・キリストが表象されているが、『スガラムルディの魔女』はこれら二作品の宗教批判の同一線上にある作品である。

『スガラムルディの魔女』は、歴史上の魔女図像、古代の女神、サバトに加えサッチャーやメルケルを含む多くの女性像が登場するオープニングクレジットに続き、魔女たちが鍋を煮立たせながら占いをしているシーンから始まる。主

---

[94] 「『スガラムルディの魔女』：イグレシア監督Talk！」http://eigato.com/?p=19617（最終閲覧日２月８日）

[95] Benjamin Christensen, *Häxan*, AB Svensk Filmindustri, 1921.

[96] Nicholas Hytner, *The Crucible*, 20th Century Fox, 1996.

[97] Robert Eggers, *The VVitch: A New England Folktale*, A24, 2015.

人公のホセは失業中で、元妻シルビアからの養育費の請求や共同親権を求める裁判にうんざりしていた。ホセは、同じく失業中のトニーと息子のセルヒオと共にマドリードで大道芸人に扮し、「女は異教を広めたいだけ」と叫ぶ宗教勧誘者のいるプエルタ・デル・ソルに面する金買取店への強盗を実行する。トニーが緑色に塗られているのは、スガラムルディのアケラーレで緑色の服を着用していたことと重ねられている。店内では男性が女性に執拗なピロポ[98]でセクハラをしている。ホセたちは25000個の「浮気、恨み、夫婦の憎しみがつまっている」金の結婚指輪を強奪して通りかかったタクシーに乗り込んで警察から逃走する。３人はタクシーの運転手と偶然乗り合わせた男と共に北へ逃走する。タクシー運転手は晩御飯に帰宅できなくなり「妻に殺される」と怯えるが、「女は自分が優位にいるとわかったら容赦しない」「捨てられる前に捨てろ」などというタクシー内での会話を通して、徐々に「キリスト」に扮するホセに感化される。タクシー運転手は「妻が姉妹や母と味方しあい」「女は人生を台無しにする」と言い出し、全力で警察から逃げるのを手伝う。追跡する警察同士でも「女は蜘蛛のように居心地のいい巣を作り、安心すると毒を盛る」といったやり取りがされる。途中で寄ったバルで会った老女をはねてしまうが、老女の持っている箱から粉薬が舞い、老女は空を飛び去っていく。スペインとフランスの国境へ向かう途中、オカルト番組で見たことがある魔女伝説で知られるスガラムルディに辿り着く。スガラムルディではラウブルが至る所に見られる。怪しげなバルで女主人のマリチェと娘のグラシと出会い、グラシを送った洋館ではグラシの娘のエバと出会う。彼女たちは魔女であり、ホセ達を捕獲し食べようとする。そこに警察とシルビアが乱入し、魔女と男性の争いが始まる。魔女たちはホセの息子セルヒオを生贄とし、スガラムルディの洞窟で「母」の復活を目論んだが、ホセに恋したエバが魔女たちを裏切ったことで形勢が逆転する。また、「母」が暴走したこともあって、人間たちはスガラムルディの洞窟からの脱出に成功する。

---

[98] 女性の肉体を褒める言辞で、現在は「強姦犯と同じである」とされている。El País、2015年１月15日。https://elpais.com/elpais/2015/01/14/opinion/1421246904_174807.html（最終閲覧日２月９日）

図17 スガラムルディの魔女のポスター[99]
図18 ラウブル（2019年８月筆者撮影）

冒頭では十字架を背負った「キリスト」が男根を表象するライフルをぶっぱなしながら登場する。男性は女性から経済力を奪って、マドリッドに男性中心社会を築いてきたが、それを象徴するかの如く大量の金の結婚指輪を強奪する。「キリスト」に相対するのが大鍋で毒薬を作り占いをする魔女たちで、マリチェ、グラシアナ・バレネチェア、エバという三世代の魔女やホセの元妻シルビアなどの魔女が登場する。カルメン・マウラ演じるグラシアナ・デ・バレネチェアは、1610年のログローニョのアウト・デ・フェにおいてアケラーレの女王として裁かれた人物の名前である。魔女はバレネチェアとイリアルテアのように親族関係の中で受け継がれ、また魔女は女性であることが定型であるとされたため、女性三代の魔女術の伝承といった関係性が用いられている。また父親が羊飼いだったということで、魔女（男）に羊飼いが多かった史実が反映されている。

マリチェは長い白髪の老婆という伝統的な魔女像で登場し、エバは若くて美しい女性である。エバは聖書のイブのスペイン語名で、アダムとも重ねうるホセを好きになり、誘惑し、協力して一緒に現状から脱出しようとする。「キリスト」であるホセの元妻シルビアの職業は、魔女であると目された病気癒しの女、すなわち看護師であり、二人の関係は冷え切り対立的で、お互いの話を全く聞

[99] https://www.paradard.com/images/cinemard/peliculas/2013/posters/las_brujas_de_zugarramurdi_poster.jpg（最終閲覧日２月８日）

こうとせず、ホセが「魔女のような妻にもうんざりだ」と叫んでいる。シルビアはグラシアナ・バレネチェアに捕まり、ヒキガエルの血を飲まされ魔女にされる。ヒキガエルはスガラムルディのアケラーレでもしばしば言及されたが、気持ちの悪い見た目で、外皮に毒があり軽蔑される存在であることから、ヨーロッパでは魔女の軟膏の材料であるとされてきた。

老婆の魔女マリチェが営業するバルでは人間の手や足とみられるもので出汁をとり、ホセの息子セルヒオを火で炙って食べようとする幼児殺害がみられる。魔女の饗宴でも前菜で人間の指のフリットが供されている。スガラムルディに近づくと女たちが自分の手でスカートをたくし上げるなど、1595年のマリア・エルナンドの供述にあるようなシーンもある。

アケラーレでは山羊の姿をした男性の悪魔が中心となっていたが『スガラムルディの魔女』のアケラーレでは、洞窟の中で大地母神を中心としている。そこで男性たちは甲斐性のない脆弱な厄介者としてはりつけにされ、そして異端審問官たる刑事も図14にあるような愚鈍や不徳を表すカピロテを被せられ、拷問され火炙りにされようとしている。魔女狩りは女神崇拝という「古い信仰」を破壊し、男性的なたくましさに価値を置くキリスト教という特異で野蛮な信仰の勝利を示す[100]とされているが、映画の中のアケラーレでは、その「女を苦しめ続ける文明」を終わらされるため、破壊された「母」の復活を実現しようとする。「“神の似姿として男が創られた”だと？　神の似姿として創られたのは女だ。女がアダムのあばら骨の一本なんて信じられるかい？」という台詞があるが、魔女たちは迫害されるか弱い性ではなく、何百年も女性を侮辱した男性に復讐し、女性中心の社会を取り戻そうとする力強い性として女性を描いている。しかしこのアケラーレは失敗し、女性による支配は成立しない。

5．おわりに

ヨーロッパの他の地域では魔女での女性の割合が高く「魔女」と表記されることが大半であるため、本稿でもbrujo/brujaと二つの性で表わされている語を一貫して魔女と表記してきたが、実際のスガラムルディの魔女における男性の割合は他のヨーロッパ地域よりはるかに高く、魔男（brujo）も多い。そのため、確かに高齢の未亡人といった女性も無視できない数存在するもののスガラムルディの魔女狩りについてジェンダーの視点からのみで論じることはできな

[100] ジェフリ・スカール、ジョン・カロウ（小泉徹訳）『魔女狩り』岩波書店、91頁。

い。ランクルの影響により子供の告発が導入され、親族関係間の魔術の授受やアケラーレの重要視というヨーロッパの枠組みも見られるが、スガラムルディ独自の特徴として、男女問わず貧しいものが多く、まずは納税額の低い下層民の排除に加え居住の更新を認められなかったアゴテが魔女として迫害されたことが挙げられる。アラニバルの不当な搾取に対する羊飼いの抗議への制裁という側面も顕著である。それに対してサラサールが調査と実証により容疑者の供述は妄想であると結論し、被害者数を抑え、短期間で迫害を終息させたことはスペイン異端審問の大きな特徴が表れているといえよう。この一連のログローニョのアウト・デ・フェに関する報告書の魔女迫害の文学文化における影響は大きく現在に及ぶが、アレックス・デ・ラ・イグレシア監督は事件の特徴を取り入れながら、これまで製作された映画の中の典型的な魔女像とは一線を画し、キリスト教を中心とした男性中心の西洋文明を批判している。本来ジェンダー的な問題ではないスガラムルディの魔女事件を、男女間戦争とし、キリストと魔女を戦わせている。異端審問官と容疑者を反転させて男性や刑事といった裁き手を火炙りにし、女性優位社会を取り戻そうと試みるも失敗する、このようにどちらも優位とはしない社会のあり方の提示は、魔女を用いたジェンダー表象において画期的といえよう。スガラムルディの魔女は映画でジェンダーの上下関係ではない新たな段階の解決が何かの展望を示唆するかたちでアダプテーションされている。またラストシーンで魔女が全員登場することから、魔女は滅びたわけではなく、また復活することが示されている。現状では男性優位が保たれたが、いずれはまた脅かされることが暗示されている。